

# 勉誠通信

Bensey Newsletter 第二十九号

2011.1.18

小論・研究余滴・随想

宮沢賢治―人間肯定のユーモア

大角 修



本の題目

―『図説書誌学』の刊行によせて

住吉朋彦

一日三学

石川 洋

振り返れば私がいる

―早稲田大学に入学す(四)

立松 和平

饅頭の語源

小林祥次郎

近刊ニュース

- ・『イーハトーブ悪人列伝』
- ・『白居易研究年報 第十一号』
- ・立松和平 『境界を生きる2』  
全小説11
- ・戦後派作家たちの病跡』
- ・長恨歌 楊貴妃の魅力と魔力』
- ・関流和算書大成―関算四伝書―第三期』
- ・謡曲画誌 影印・翻刻・訳註』
- ・アシア 137ア 『東西交渉とイラン文化』
- ・『日本ミスティアス妖怪・怪奇・妖人事典』

小論・研究余滴・随想など本誌にお寄せ願います。

勉誠通信 バックナンバー

<http://www.bensey.co.jp/mm.html>

# 宮沢賢治——人間肯定のユーモア

大角 修

(地人館代表・宗教評論家)

ジョークがいっぱい

宮沢賢治の作品がユーモラスであることは童話集『注文の多い料理店』などを読んでみれば、誰しも異論はないだろう。「銀河鉄道の夜」でも、プリオシン海岸の化石調査の大学士など、けつたいな人物が登場する。

ところが、一般的な賢治のイメージは、そうではない。広く知られている「雨ニモマケズ」からストイックな印象をもっている人が多いのではないか。有名な詩「永訣の朝」も妹トシの死を悼む重い内容である。

しかし、現実の賢治は、ふざけた騒ぎやジョークが好きで人物だった。作品にもジョークは豊富に盛り込まれている。

けれど、銀毛兎なんて兎はない。そんなインチキな兎を育てても、ついに報いられることはない。

この男は、まだ頬の赤い青年で、野良仕事は好きじゃない。顔は日焼けもせずに美しい。それで「副業」に精を出しているのだが、べつ甲ゴムの長靴や緑のシャツを着てめかしこんでいる。あまり性根は入っていないのだ。

ばかだなあ。けど、こういうやつ、いるよね、という詩だ。

この詩のユーモアはヒューモラス、つまり人間肯定的である。他の詩や童話にも見られるが、とりわけ文語詩群に顕著なユーモアである。

賢治の最後の作品群である文語詩には、さまざまな人物が描かれ、悲喜こもごもの人生がある。賢治は、あまり立派には生きられない人びとも含めて、その人生を肯定したいと願って文語詩を書いたのだろう。

これは当たり前のことでもある。ど

強靱なユーモア精神

賢治のユーモア精神は強靱である。三十七歳の病死の前に自分で清書した百五十一篇の文語詩にも、その絶望的な状況の中でユーモラスな詩がかなりある。一編だけ紹介する。

雨降りしづくひるすぎを、  
青きさゝげの籠とりて、  
巨利を獲るてふ副業の、  
銀毛兎に餌すなり。

兎はついにつくのはね、  
ひとは頬あかく美しければ、  
べつ甲ゴムの長靴や、  
緑のシャツも着くるなり。

この詩は「副業」と題する。主人公は若い農民だ。彼は雨の日なのにササゲの実を摘んできて兎にやっている。上等な毛皮がとれる銀毛兎を育てて巨利を得ようというわけだ。

であり、恩恵である。脱穀塔の窓、あるいは雲間にぽっかり見える青空に、豊穣の歓喜天が飛んでいる。

そもそも詩の原初は神々をたたえる讃歌であった。日本の和歌では、移ろいゆくものの無常を哀しむけれども、その向こうに久遠の仏がある。

賢治の「悪人」も同じだ。そこには、どうしても悪をなしてしまう者への同情と共感があり、どんな人にも救いがあるというメッセージがある。

法華文学の巨きな旅

賢治は法華経を信奉し、「法華文学の創造」をめざした。しかし、作品には直接あらわれない。日蓮が「文底秘沈」と言ったように、法華経は作品の文の底に秘かに沈め置かれている。

そして賢治は、母に自分の童話は「ありがたい仏さんの教えを書いたもの」だから、「いつかは、きつと、みんなでもよるこんで読むようになるんす

# イーハトーブ悪人列伝

大角修 著  
四六判並製・定価二〇〇円（税込）

今までの賢治論は、せつかくのおもしろい話をつまらなくしていた!? 「クラムボンはわらったよ」で有名な『やまなし』、幻想的な情景が印象的な『銀河鉄道の夜』、今なお根強い人気を誇る『雨ニモマケズ』、伝説の広場をめぐる冒険譚『ポラーノの広場』…。コミカルでユーモラス、でも時に悲しく怖い。そんな宮沢賢治作品の新しい楽しみ方。

はじめに―賢治のマジック  
森の奥にて呼ぶものの声がする―いつか秋の日に  
どんぐりと山猫  
イーハトーブ悪人列伝―もののはずみ・事のなりゆき論  
土神とぎつね／大したやつら／イーハトーブの墓碑銘  
ユートピアのゆらぎ―青い昔の幻燈のように  
ポラーノの広場／雪渡り／やまなし  
反浄土―ねんねこ狸の大罪  
蜘蛛となめくじと狸／二十六夜  
三つのレクイエム―ねずみたちのアンハッピー  
ツエねずみ／鳥箱先生とフウねずみ／クンねずみ  
西根山有情―かあいそう論  
山男の四月／祭の晩／銀河の彼方に／銀河鉄道の夜／雨ニモマケズ  
おわりに―衝撃のペンネンネンネン・ネネム



じゃ」と語ったという。

たしかに喜んで読まれるようになったが、「仏さんの教え」のほうは、どうも分が悪い。賢治は好きだけれど、法華信者だったとは思いたくないという人も多いのである。

その一因は、近代仏教学で仏教をむやみに思想的に考えて現実離れし、ものごとをつまらなくしていることだ。宗教は必ず、にぎやかな法会や祭礼を

伴うことが見落とされている。

祭礼は神社の狂言神楽のように、おかしくユーモラスなものでもある。賢治の生家の宗旨だった真宗の寺々で昔はよくおこなわれた節談説教にも落語みたいな話が多い。説教僧が投げ銭の割をねらって面白く演じたからだが、そういうのは具合が悪いと教団指導部のまじめな人たちが言い出して、禁止したらしい。残念なことである。

しかし、賢治の「法華文学」においては「雨ニモマケズ」や「永訣の朝」といった悲しい詩も、けつたいな「悪人」たちも同居している。賢治の好みの言葉で言えば、「善逝スガタの示された光の道」につながる「巨きな旅」のひとつこまなのだから。



## 本の題目―『図説 書誌学』の刊行によせて

住吉朋彦

（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫准教授）

このたび勉誠出版から、二〇一〇年十二月一日前後六日間に行われた「慶應義塾大学附属研究所斯道文庫開設五〇年記念 書誌学展」の図録に基づき、書誌学用語索引を附して表紙や題目を一新した、『図説 書誌学―古典籍を学ぶ』が刊行された。

斯道文庫の「書誌学展」は、使用施設の都合や安全管理の問題から、六日間と会期が短く、せつかく関心をもっていたいただいた方からも、足を運べないとお叱りを頂戴した。私共としても、なるべく多くの方に書誌学という学問分野を知っていただきたいという思いを抱きながら、心苦しい気持ちで会期を終えた。

また、展示会の内容を記憶に止めて

いただけるよう、現在の斯道文庫が取り組んでいる書誌学のあらましと展示品の解説を述べ、勉誠出版の協力を得て上記の図録を製作した所、いろいろと不備もあるが、おおむね好意的な反応をいただくことができた。ただ会期の最終日、第一線の研究者をお招きした同時開催のシンポジウムに、多くの聴衆が集まって下さったこともあり、終了まで数時間を残し、用意の冊数すべてを、底を払ってお頒かちしてしまふ仕儀となった。会場の混雑と併せ、ご不便をおかけしたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。

この図録に対し、幾分か取り柄もあると、勉誠出版編集部にお認めいただき、製作段階から市販版の増刷をお考

えただけだったことは、私共にとって非常に幸いであり、結果として展示会での不備を、多少とも補うことができようかと、このたびの刊行をありがたく思っている。

さて、今回の増刷では、一展示会の図録という性質を帯びながらも、一般の読者を想定した題目に改め、表紙も鮮やかな意匠に一新された。こうした効果的な改装は学者のよくする所ではなくて、もちろん編集部の肝煎りのおかげである。

古典を見ていても、同じ本に異なる題目をつけ、題目を改めた後の方が広く行われた事例はよく見受けられる。思いつくままに挙げると、鎌倉時代の儒者・菅原為長編と伝える金言集の『管蠡抄』は、江戸時代には『博覧古言』として刊行されている。現代の学者は起源を重んじて前者を用いるが、近世に後者が通名であったことにも、大きな意味がある。

古典における本の題目の問題については、図録に詳しく述べる暇がなかった。しかし、本の名を表わす題目は、書物に関する重要事項の1であり、特に図書の目録作りでは、どの形を採用すべきかと腐心する場合が多い。

漢籍における題目の在り方は、古くから本文の首に明示する慣習があった比較的稳定しており、本文首題、いわゆる「内題」をその図書の総名とする。しかし例え、宋代の版本の系統では、時に序目の題が内題を兼ねる構造をもっていたり、禅籍では巻立てや標題が柔軟自在であったり、例外的な処置を要することもある。

また、名は体を表わし、題目から本文の内容を推すことができるけれども、新しい規範に即応すべき韻書(音に基づく分類を施した字書)や、商業的な類書(中国式の百科全書)などでは、「大明成化庚寅重刊改併五音集韻」と、年

物語」の注釈が「水原抄」(「源」の字の分ち書)と称されたりと、判じ物のような題目があり、あまり有名でない作品の場合には、にわか意を過ぎず当惑させられる。

日本では、たとえ舶来の漢籍であっても、外題には具名を書かず、略称や異称を記すことがある。漢文化の涵養も著しい室町期の禅僧たちが、宋元版の『王状元集百家注分類東坡先生詩』を日本在来の表紙にくるむ場合、奥ゆかしく「雪堂詩」(蘇軾の号)等の異称を題簽に認める。また『論語』の版本を取って「六藝喉衿」(孟子題辭)における「論語」の評語と呼んだ外題もある。そ

号を冠して出版の新しさを謳ったり、「新編排韻増広事類氏族大全」と、編集の創意を強調したり、題目が本の顔ともなることを見越し、本文の価値を高唱する。しかし、ちよつとした変更や工夫を大仰に称した場合もあるから、題目の意味する所は、常に本文の伝流を踏まえて測られなければならない。

漢訳仏典には、インドの習慣を受けて、漢語の図書としては例外的な形の題目が多い。特に具名と呼ばれるお経の正式名は、しばしば非常に長く、それぞれに略称を伴って行われている。例え、いわゆる『楞嚴経』は、具さには「大仏頂如来密因修証義諸菩薩万行首楞嚴経」と言うし、『大毘盧舍那仏神変加持経』は、具名には含まれない「大日経」という略称をもつ。

また翻訳の重層も、本文と題目の関係を複雑にする。『大方広仏華嚴経』の六十巻本と八十巻本は、同じ題目で

の名を直に指さないことで、本文の玄妙な価値を尊ぶ習慣とも見られようか。

江戸時代の儒者・伊藤仁斎をはじめ、主著となる自らの『論語』の注釈書で、「最上至極宇宙第一論語」と異例の美称を用いたが、後には削られ『論語古義』の名に落ち着いた。国学者の場合、本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』は、象徴的な「玉の小櫛」の部分を外題にとった。また草双紙の題目は、内容への期待を高める題簽の名が主で、これは売れ行きに直結したためか、しばしば変更されたようである。

このように見てくると、本の題目には、時代や地域の違いによって、揺れ

はあるが、単なる巻立ての相違ではなく、別訳に当たっているし、逆に『正法華経』と『妙法蓮華経』は、題目、訳文こそ異なるが、基にする本文どうしは緊密な関係にある。

日本の図書では、書物の表紙などに記して内容を知らせる「外題」をもつだけで、本文には名目を含まないことがある。中国流の体式を追った場合ももちろん多く、勅撰集など、朝廷の周辺の公的な撰述である時にはその限りではないが、私的な撰述や古典の注釈であったり、成長過程の未定稿が写し継がれていたりすれば、外題のあった表紙が失われ、無名のまま流通したり、題目はあっても、後世の呼称であったりして、題目を定めるにも類本の対查が求められる。

また日本の図書の題目には暗示的なものが目につき、例えば大江匡房の『江談抄』の一本が「水言抄」(「江談」の字の偏)と呼ばれたり、源親行の『源氏や幅がある。本の種類を特定し、他との区別をつける上では、その変化に苦慮する場合もあるが、本の異名も書物をめぐる文化の一端と言えるであろう。話は逸れたが、今回、私共の『書誌学展図録』は、『図説 書誌学—古典籍を学ぶ』と名を変えた。こうして世に送り出されることで、この本も命運を変え、一研究所の頒布品が、より広い読書を得ることになる。私共にとつて耳の痛いご批判もあろうが、これまでとは異なる反響をいただくことを、執筆者の一人として心待ちにしている。

「書物」という文化遺産の継承のために――

昭和三五年の開設以来、書誌学の専門研究所として学界をリードしてきた斯道文庫所蔵の豊富な古典籍の中から、特に書誌学的観点から重要なものを選出。豊富なカラー図版・解説を通覧することで、書誌学の理念・プロセス・技術を学ぶことが出来る。巻末には「書誌学用語索引」を附し、レファレンスツールとしても充実。古典籍を知る資料集として必備の一冊。



# 図説 書誌学

## 古典籍を学ぶ

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編  
A4判並製・定価三二七五円(税込)

# 一日三学

石川 洋

(托鉢者)

十七歳の若き日、無所有奉仕の師・西田天香さんに身を投じた私は、只ひたすらに托鉢生活にいのちを捧げた。入園の決意に導いた師の一言は「人間は偉くならなくていい、立派にならなくていい、人間はお役に立つ人になることである」という教示であった。

何かを求めて苦悩していた私は、自分を捨てて捧げる生き方のあることに感動し、弟子にさせて下さいと伏して懇願した。その時の曇の目を今でも鮮明に覚えている。

一日一日が感動と目覚めの托鉢奉仕の下坐行であった。「求める心は淋しい、捧げる心が豊かである」。車が動くためには油が必要であるが、車が動き出すと油は見えなくなる。その光

が、一日三人を師として拝し、学んだことを記録し始めると、一日の大半をそれに向き合わなければならなかった。

又、内容は粗末なものであっても、次第に多くの人に許されて生かされている感謝と感動を覚えることが出来るようになった。

「やるなら決めよ、決めたら迷うな」の決意は、その時生まれた誓いである。長い人生の間には「一日一恩」、「一日一根」と、その深め方を変え、わが人生の戒めとしてきた。

今、八十一歳を迎え、「晩晴」、「人生本来晩晴を重んず」と終わりから始める魂の見つめ方を心している。

この一書も「一日三学」のわが人生の記録としてお受けとめ下さり、御高導を乞い願うものです。

『やるなら決めよ 決めたら迷うなより抜粋』



染ある一滴の油になろうではないか」。求道と捨身の心身の置きどころの言下に魂の蘇生の躍動を覚えた。

しかし、天香さんはいわゆる一般の宗教指導者のように教説を以って導く師ではなかった。「托鉢から学びなさい」、現実の問題の奥には必ず真実がある。その働きに目覚めることであるという導き方であった。

しかし未熟な私は、だんだん光の見えないトンネルの闇の中で身動きが出来なくなっていた。それでもトンネルの向うには、光いっぱいの原っぱがあると信じて、一歩々々歩みつづけた。省みれば、妥協することなく、きびしく、あたたかく、最後まで具体的な問題を通して導いて下さった師恩に伏し

て御礼申し上げるばかりである。

そんな心のトンネルの中で、灯を見いだしたことがある。それは、孔子の論語にしたためてあった「三人行なえば、必ずわが師あり」という教説である。孔子は、父は地方の下級役人であり、母は差別をされた階級の生い立ちであったという。従って幼少時代は友達のない境遇にあり、その限られた生活環境の中から見出した人生訓なのであろう。しかも一説によると、一人、一人を見つめる深さの中から、孔子の教えの中心をなす「礼」の主論が生み出されたといわれている。

一人で苦しんでいる闇とは何か、自分の壁を破れない執われであり、他から学ぼうとしないというよりも、他が見えていないあがきにあることにハツと気づかされて、「一日三学」、一日三人の人に学ぼうと発願をさせて頂いた。

なんでもないようなことである

## やるなら決めよ 決めたら迷うな

石川洋 著

四六判並製・定価一〇五〇円(税込)

托鉢者・石川洋が易しい言葉で伝える、人生を豊かにする話の数々

あなたが、人間関係に疲れたとき、子育てに悩んだとき、仕事がうまくいかなかったとき、生きる力を失ったとき……  
そつとこの本を開いてみてください。  
きつと乗り越える光が見えてくるはずです。

人間愛叢書

### ありがとう宣言

石川洋著

四六判上製 定価一八九〇円(税込)

障害者やカンボジアの難民たちとの触れあい、  
人生を変えた師たちとの出会い。  
無手の聖尼・大石順教尼、マザーテレサ、坂村真民などから学んだ  
「生きる」ということ。  
人生において究極に大切なものは、  
「ごめんさい」と「ありがとう」である。

人間愛叢書

### 生命讃歌 お伽噺

石川洋著

四六判並製 定価一八九〇円(税込)

したきり後 浦島太郎、かぐや姫……  
我々が親しんできたお伽噺には  
「生きる力」が描かれていた。  
素朴でたくましい庶民の信条を  
さらけだしながら、人間生活の希望を  
語りかけるお伽噺。  
それは、現代を生きる  
我々の救いともなる。



# 振り返れば私がいる——早稲田大学に入学す(四)

立松和平

(作家)

「早稲田キャンパス新聞会」の活動は少しづつはじめていた。新聞会は翌年の受験生のために学内案内の本を毎年夏に発刊していて、私はその本の写真をすべてまかされたりした。また新聞には書評なども書きはじめていた。

学内では相変わらず集会があり、デモがあったりした。学部単位の学生大会が開かれ、決をとるとスト解除が大勢を占めるようになって、次々とバリケードが撤去されていった。スト派は学生大会を開きたくない。

政治経済学部の学生大会は、学内では最後に開かれた。全学共闘会議議長は政経学部の大口昭彦で、第一次早大闘争の本部は政経学部自治会にあるようなものだった。

日間にわたる早稲田大学全学ストは終わったのだ。

早稲田キャンパス新聞は客観中立報道の立場をとる新聞であった。しかし、会の内部では、客観中立という立場などあるのかという議論があり、そのことで激しい対立が起こっていた。百五十日にわたる全学ストの後遺症というものであった。左翼的な影響を受けてストに参加したものは、早稲田キャンパス新聞は秩序的体制的だと思ふようになり、客観中立の立場とすなわち右翼的な大学当局の立場を代弁しているにすぎないとみなすようになった。私もそのように感じはじめていたが、私自身の思想はそれほど強固というものでもなかった。新聞会の執行部は客観中立派が占め、人的配置もそのようになされていたのである。まだどちらの派ともいえない多くの一年生は、両派から喫茶店で話そうと誘わ

一年生はあくまでオブザーバーで投票権はなかったが、私は周辺の仲間とともに学生大会に望んだ。一年生たちは最後の二階席に集まり、時折声を合わせて叫んだ。

「共闘会議粉碎!」

壇上では各組織の代表が次々と立つて演説をする。できるだけ長い時間を経済するようにすれば、時間切れで流会になる。それが狙いである。どんなに早くても大会終了までには夜が明けるはずであった。

学生大会はまことに退屈きわまりなかった。演説の内容は、演説者の所属する組織の名を聞いただけでわかった。大口昭彦全学共闘会議議長、彦由常宏副議長の姿を見たのも、この時

れたりした。

そんな時、新聞会慣例の夏の合宿が外房の海水浴場であった。夏休みの電車は満員で、車内で私は立つていった。部員も車内にばらばらに散っていたのだが、別のグループが乗りあわせた客に家庭教師のアルバイトを頼まれ、下宿が近いということで私にその役がまわってきた。

合宿といつても、浜でサッカーをしたり、遊んでいるようなものだった。反体制派は一年生も含めて一人も参加しなかったのである。

九月になってからとうとう早稲田キャンパス新聞会の総会が開かれた。対立がはつきりしていたので、ミニ学部集会のようなもので、この時も一年生は議決権のないオブザーバーであった。

論争は荒れたのだが、執行部の予定のとおり最後に投票ということになり、反体制派は破れてキャンパス新

がはじめてであった。ことに彦由常宏とは後年親交を結び、剣道の稽古をつけてもらうことになる。学生服を着た彦由副議長は、この時政治組織中核に所属していて、後に除名された。連日連夜の闘争による過労のせいも、氏が壇上で血を吐いて倒れたのが印象的であった。

この学生大会には、スト解除を求め一般学生が多数参加していた。ストに関する議決の動議がたびたびスト解除派の学生から出されるが、スト派から否決される。そのくり返しであったが、とうとうスト続行か解除かの決議がなされることになり、会場は騒然となつて暴力的な気分があふれた。

結局挙手による投票となり、ストは解除されたのである。スト派学生が前のほうに集まり、大口議長が悲痛な雰囲気で演説をする姿が私の脳裏に焼きついている。

外にでると夜が明けていた。百五十間会を去ることになった。さてお前は

どうするか、私は問われることになった。客観中立報道など体制を守るための幻想に過ぎないと思いはじめていた私は、「早稲田キャンパス新聞会」を去ることにした。残った執行部のメンバーの顔ぶれから、どんな新聞が発刊されるか想像がたった。先頃の全学ストを後に第一次早大闘争と呼ぶようになるのだが、闘争終了と同時にあつこつちでサークル組織の分裂が起こっていた。

去つていったメンバーは、後に「早稲田新聞」を発刊する。主観に満ちた文学的な新聞であった。昔からある「早稲田大学新聞」とはまったく別物である。

私は誘われたが、早稲田新聞には参加しなかった。どんな組織にも所属せず、文学的な方向へと一人で歩むつもりであった。



# 第一期完結・第二期刊行開始

## 立松和平全小説

全3期全30巻  
月1冊ずつ刊行予定  
A5判上製・  
各巻本体価格四七二五円（税込）

つねに時代とともに歩み、  
真摯な視線で現代を見つめ、  
人間とは何かを問い続ける続ける  
立松文学の連峰のごとき名作群。

立松和平の四〇年以上にわたる創作から、  
七三冊に及ぶ小説作品の全てを集成。

各巻には新たなタイトルをつけ、年代順を  
考慮しつつテーマ毎に巻構成を行った。  
一〜九巻末に著者自身による書き下ろし  
メモワール「振り返れば私がある」を  
収録。

一〇巻からは、子息・横松心平氏による  
エッセイ「振り返れば父がいる」を収める。

**\*詳しいパンフレットがございます。  
ご希望の方は、小社までご連絡  
ください。**

### 第10巻 境界を生きる1

まだ遠かったが、  
雷は確実に近づいてきた。

先祖伝来の田畑を売り、残った土地で  
トマトを栽培しながら農業生活を取り  
戻そうと奮闘する満夫。中央と地方  
都市と農村、家族と個人、経済成長と  
労働構造……ひとびとが生を営む境  
界線上に現れた〈崩壊〉を予感し、時  
代の核心を射て書かれた『遠雷』。〈土〉  
を手放し、〈家〉から離れた人間の生は、  
本来的なものとして存在し続けること  
ができるのか。続編『春雷』とともに  
前期立松文学の最高峰をなす、代表的  
傑作。

◆目次◆  
遠雷  
春雷  
振り返れば父がいる1（立松心平  
解説 黒古一丈）

- 第1期（全9巻）
- 第1巻 青春の輝き
- 第2巻 惑いと彷徨
- 第3巻 異議ありの声
- 第4巻 闘いの果て
- 第5巻 旅に棲んで
- 第6巻 『戦後』のはじまり
- 第7巻 昭和という時代
- 第8巻 歴史へのまなざし
- 第9巻 冒険に駆り立てられて

- 第2期（全11巻）
- 第10巻 境界を生きる1（解体する共同体 家族）
- 第11巻 境界を生きる2（滅亡から救いへ）
- 第12巻 境界を生きる3（破壊される農）
- 第13巻 境界を生きる4（農への思い）
- 第14巻 ここより他の場所
- 第15巻 越境者たち
- 第16巻 永遠への旅立ち
- 第17巻 母への憧憬
- 第18巻 愛の形
- 第19巻 周辺に立つ
- 第20巻 もう一つの世界

- 第3期（全10巻）
- 第21巻 父祖の地へ
- 第22巻 反権力という生き方
- 第23巻 庶民列伝
- 第24巻 おのれを信じて
- 第25巻 生命への凝視
- 第26巻 生きていく「私」
- 第27巻 晩年へ
- 第28巻 救世
- 第29巻 道の人1
- 第30巻 道の人2



⇒目次に戻る

## 饅頭の語源

### 小林祥次郎

### 饅頭

頭をチュウウと読むのは唐音（鎌倉時代以後に入った漢字音）だ。つまりマンヂュウが輸入されたのは、鎌倉時代以後ということになる。道元の『正法眼蔵』（看経）に、仏殿の釈迦の前で経を読む時に、麵一椀・羹一杯・饅頭六七個を僧に配ることが見えるのが、日本での最古の例か。振り仮名が無いから何と読んだかは分からないが、文安元年（二四四四）成立の辞書『下学集』でマンヂウと読んでいるので、これより少し前だが、道元もマンヂウと言っていたと考えたい。

饅頭の起源について、諸葛孔明が作ったという話がある。宋の高丞の『事物紀原』（九）に、二二五年に孔明が

南蛮を征伐した時に、蛮地には邪術が多いから、神に祈って陰兵を借りるのが良い、神を祭るのに蛮俗では人を殺してその首を用いると神が受け入れると言われたのに、孔明は羊や豕ぶたの肉を包んだ麩（小麦粉）で人の頭をかたどったものに換えたが、神は受け入れた、後人は饅頭と呼ぶようになった、とある。『三国志演義』（九一回）にも少し違う形で出ている。村瀬栲亭の『芸苑日涉』1807（一〇）に引く『七修類稿』という本には、「蛮頭」だったが訛って「饅頭」になったとあるそうだ。

青木正児『中華名物考』（昭和三四年）では、「是等は取るに足らぬ俗説である。」と一蹴して、「古くは『餅賦』（晋の束皙の文）に『曼頭』と書いてあり、

後に食品だから、『饅』の字を書くやうになったのである。此の曼の字を考へて見るに、…皮膚のきめが細かく、つやつやしてゐる意味に用ゐられてゐるから、曼頭と云ふのも此物が其のやうな感じがするから起つた名ではなからうか。」とする。少し違うが、北慎言『梅園日記』（二二（弘化二年（二五）刊）では、曼は覆うもの、頭は宴席で最初に出すものの意味ではないかとする。諸葛孔明とする説は面白いが、こういう話は有名な人名にこじつけられることが多いから、あまりあてにしないほうが宜しかろう。

饅頭の神を祭る神社がある。奈良市



饅頭の祖神 林神社

エールマガジンの登録申し込み・取り消しは[www.ajinomoto.com](http://www.ajinomoto.com)

饅頭の祖神 林神社



漢国町の漢国神社の境内に林神社があり、「饅頭の祖神 林神社」という石碑が立っている。宋に渡った建仁寺の龍山に従って貞和五年（一三九四）に日本に来た林浄因が、奈良に住んで饅頭を作り始めたという（漢国神社のパンフレット「漢国神社由緒略記」「林神社略縁起」による）。これは貞享元年（一六八四）の黒川道祐著の京都の地誌『雍州府志』（六）に見えるのが最初か（子孫だという東京都中央区の塩瀬本家にはもっと古い資料があるのだろうか）。確証は無いようだが、いちおうこれに従っておきたい。

鎌倉室町時代には、栄西や道元をはじめ多くの禅宗の僧侶が中国に渡っている。そういう僧侶やその周囲の人が、中国での風習を伝えたことは十分に考えられる。ちなみに、浄因の子孫の林宗二（一四九八―一五八二）が室町末期に出版したと言われる辞書『節用集』の一本を饅頭屋本と呼んでいる。

林浄因より前の道元が書いたものに「饅頭」という語があるので、浄因から饅頭が始まるのは矛盾するようだが、道元は中国でのことを述べているのかもしれないし、林浄因は饅頭作りを職業にした最初だと考えれば、説明が付くだろう。

「十字」という食品が饅頭だという説もある（嬉遊笑覧）。中国の史書『晋書』（何曾伝）に、何曾は贅沢で蒸した餅の上を折いて十字を付けなくては食べなかつたとあるのによく似ている。平安末期の辞書『色葉字類抄』に「十字 ジウジ 餅名」とあり、鎌倉幕府の

記録『吾妻鏡』の建久三年（一一九二）十一月二十九日の条に、源実朝の誕生の百日の祝いに幕臣たちに十字を送ったとある。平安末期にはあったものだが、これが正しければ、名は違っているも、饅頭の実体は道元や林浄因よりも前に伝わっていたことになる。そういうこともあり得ないことではあるまい。

明応九年（一五〇〇）ころ成立の『七十一番職人歌合の五十七番調菜』に、「砂糖饅頭、菜饅頭、いづれもよく蒸して候」とある。砂糖饅頭というのは砂糖で小豆を煮た餡の入っているもの、菜饅頭というのは野菜を詰めたものと言う。中国風のものとは日本独自のものがあつたことになる。『醒睡笑』（七）には、小豆ばかり入つた饅頭と砂糖饅頭とを比較する話がある。砂糖の入らない小豆の饅頭もあつたことになる。「蒸して候」とあるのだから、今の製法とあまり違いは無いようだ。『日葡辞書』にも、Mangu（マンチュウ）

小麦の小さなパンであつて、湯の蒸気で蒸した物」とある。

明の遣臣で日本に亡命して水戸光圀に仕えた朱舜水（一六〇〇―一八二二）が、中国の饅頭は鶏・鵝・鴨の肉、或いは猪肉・猪油を餡とすると述べている（朱氏談綺・下）。これは今の中華饅頭のようなものだ。逆に考えれば、日本の饅頭は肉類ではない餡が入っているということになる。

江戸時代の文学によく見える饅頭は、江戸浅草で売っていた米饅頭だ。井原西鶴の『好色五人女』（四）では、ヒロインのお七から欲しいものを尋ねられた小坊主が「それなら、銭八十と、松葉屋のカルタと、浅草の米饅頭五つと、世にこれより欲しいものはない」と言う。山東京伝には『米饅頭始』「18」という黄表紙（大人向けのパロディ絵本）がある。その語源については、

①慶安（一六四八―五二）のころ、鶴屋の娘のおつるが作り始めた（菊岡沾涼『本朝世談綺』）、②常の饅頭は麩で作るが、これは米で作るから（山東京伝『骨董集』上）、③遊女を「よね」と言う。女郎饅頭と言うことだろう。野郎餅というものもある（柳亭種彦『用捨箱』上）、などの説がある。



新刊・近刊書籍

新編森克己増補日宋文化交流の諸問題

著作集4 新編森克己著作集編集委員会 編 A5判上製・定価一〇五〇〇円（税込）

戦争を知らない国民のための日中歴史認識 『日中歴史共同研究〈近現代史〉』を読む

笠原十九司 編 A5判上製・定価二六二五円（税込）

アジア遊学137 東西交渉とイラン文化

井本英一 編 A5判並製・定価二一〇〇円（税込）

明治唱歌の誕生

中山エイ子 著 A5判上製・定価八四〇〇円（税込）

白居易研究年報 第十一号 特集『長恨歌』

白居易研究会 編 A5判上製・定価四四一〇円（税込）



◆◆ Web ページのご案内 ◆◆ <http://www.bensey.co.jp/>

近刊を含む書籍の内容紹介から、新刊・既刊書籍のご購入、最新ニュース・書評掲載情報など。

◆◆ ご注文方法 ◆◆

- ① web ページによるご注文 <http://www.bensey.co.jp/howtobuy.html>
- ② 電話・FAX によるご注文 電話：03-5215-9021 FAX：03-5215-9025

◆◆ お支払い方法 ◆◆

銀行振込・郵便振替・代金引換払\*・クレジットカード\*\*等のご利用いただけます。  
(いずれの場合も、送料が別途 300 円かかります)

- ① 銀行振込の場合  
三菱東京 UFJ 銀行麹町支店普通 3848245 ベンセイシュッパン(カ)
- ② 郵便振替の場合  
00120-3-41856 勉誠出版株式会社

\* 代金引換払の場合、別途代引手数料として 315 円かかります。  
(ご注文が 3,000 円未満の場合のみ)

\*\* クレジットカードのご利用は、当社サイトからのご注文に限ります。

投稿募集

「勉誠通信」へのご寄稿を募集いたしております。  
現在のご研究内容の紹介や、ご興味をもたれていることなど、ご自由にお書き  
いただければと存じます。

◆ 執筆分量・誌面二頁(一五〇〇字程度)ないし三頁(二三〇〇字程度)  
◆ 入稿形式・テキスト形式(ワード、太郎形式も可)

◆ 謝礼・ご執筆誌面一頁につき一〇〇〇〇円分のポイントをお渡しいたします。  
ポイントとは、小社の書籍を直販にてご購入いただく際にご利用いただけます。

◆ お問い合わせおよび送付先・[nminfo@bensey.co.jp](mailto:nminfo@bensey.co.jp)  
メールアドレスに「勉誠通信用原稿」と明記してください。

編集後記

明けましておめでとうございます。二〇一一年最初の勉誠通信です。昨年は大変  
お世話になりました。本年もどうぞよろしく願いました。  
弊社では、昨年一〇八点の書籍を刊行いたしました。本年もより良い書籍を、よ  
り多く皆様にお届けできますよう、努力して参ります。

今年のお正月は、淡路島にある日本最古の社と言われている伊弉諾神宮に初詣  
に行つて参りました。元々、神社やお寺を巡るのが好きなので、日本最古と聞いて、  
一度は行かねば! と思つていた神社でした。ここは伊弉諾命が淡路島を生  
み、群神を生み終えて幽宮を淡路之洲に営んだのが始まりなんだそうです。真東  
に伊勢神宮、真西に対馬一宮があるらしく、こういう方角をも鑑みた神社の設計  
は本当に面白くて感動します。鳥居などは意外に新しく、参道にはずらつと出店  
が並んでいたのですが、さすがに本殿は風格があり、いい御利益をもらえたよう  
な気がします。

実は、初詣には三社へ行き、それぞれおみくじをひいたのですが、その全てに  
「慢心せず、身を慎んで精進するように」と書かれていて驚きました。(身を慎む)  
というのがどうしたらよいか分からず、少々難題ですが、少しでも運が開くよう、  
日々精進していこう思います。

(武内)